

## 技術論の仕切り直し

### ——『メタモルフォーゼの哲学』からの一般器官学の再考

宇佐美達朗

原著のニュアンスを可能なかぎり満遍なく伝えるという翻訳者の務めをしばし忘れて極言すれば、イタリア出身の哲学者エマヌエーレ・コッチャの『メタモルフォーゼの哲学』<sup>1</sup>の核心には技術論がある。たしかにこの本にはさまざまなアイデアやテーマが含まれている。哲学では最近になって光が当てられるようになってきた妊娠や出産であったり、昆虫の生において異なる形態を共存させる変態であったり、生きものどうしの喰う－喰われる関係であったり、家や都市に対するマルチスピーシーズ的なまなざしであったり、あるいは或る種の汎心論であったりがそれだ。これらをさしおいて技術論的な側面を強調するのはそうしたアイデアやテーマを低く見積もっているからではなく、『メタモルフォーゼ』ではとくに「繭」という形象のもとに記述される技術論がじつのところフランスの技術論的な伝統を引き継いでいるように思われるからである。さらに言えば、それはいわゆる批判的な継承であり、技術論へと新たな観点をもたらさうように思われるからである。

以下では、まず『メタモルフォーゼ』の技術論の萌芽がすでに『植物の生の哲学』<sup>2</sup>に含まれていたことを指摘し（第1節）、そのうえでその技術論の要点を概観し（第2節）、この考えがフランスの哲学的な系譜のうちに位置づけられることを見る。この系譜はさしあたりアンリ・ベルクソンにその源流を見いだすことができるものであり、生命論的な技術論とでも呼ぶことのできるようなものである。ところでこの系譜は、ジョルジュ・カンギレムがまさにベルクソンのうちに遡及的に見いだすかたちで「一般器官学」と呼んだものに重なる。ジルベール・シモンドンやベルナール・スティグレール、さらにはスティグレールを引き継ぐユク・ホイによってさまざまなしかたで展開されてきた器官学はフランスの技術論を特徴づける用語の一つと言える（第3節）が、コッチャの技術論はこれに再考を突きつけるものとなっている（第4節）。それに対して本稿ではシモンドン哲学からの応答を簡単に示唆してみたい。

#### 1. 『植物の生』における技術論の萌芽

『メタモルフォーゼ』で技術論が前景化するの第Ⅱ部「繭」、とりわけその「技術についての新たな考え」においてである。そこで新たな考えに対置される旧来の考えとは、生物学的な能力の欠如（manque）によって人間を特徴づけて技術をその補完とみなすプロメテウス神話のヴァリエーションであり、初めて「技術哲学」という名称を用いたとされる19世紀ドイツの哲学者エルンスト・カッ

<sup>1</sup> Emanuele Coccia, *Métamorphoses*, Paris, Payot & Rivages, 2020. 以下、簡便のため『メタモルフォーゼ』と表記し、引用・参照に際しては日本語訳（『メタモルフォーゼの哲学』松葉類・宇佐美達朗訳、勁草書房、2022年）の該当頁を併記する。

<sup>2</sup> Emanuele Coccia, *La Vie des plantes : Une métaphysique du mélange*, Paris, Payot & Rivages, 2016. 以下、簡便のため『植物の生』と表記し、引用・参照に際しては日本語訳（『植物の生の哲学——混合の形而上学』嶋崎正樹訳、勁草書房、2019年）の該当頁を併記する（ただし議論の流れに合わせて訳しなおした箇所がある）。

の提示した器官投影 (Organprojektion) である。これらの考え方について『メタモルフォーゼ』は根本的な批判を突きつけている。

もっとも、そこでとくに取り上げられているのが植物ではなく昆虫であり、「繭」という形象のもとに技術が思考されているからといって、このテーマが『メタモルフォーゼ』で初めて出てきたわけではない。じっさい、旧来の技術観（「不足」による定義と「器官投影」）への批判を先取りするような議論が『植物の生の哲学』には見られる。すこし長くなるが引用しておこう。

[植物が] 手をもたないことは不足 [manque] のしるしではない。むしろそれは、植物が絶えず彫琢しているまさにその素材に、余すところなく身を浸していることの結果だ。植物はみずからが発明した形態にぴたりと一致している。つまり植物にとってあらゆる形態は在り方を変化させていった結果なのであって、たんに作り出し方や働きかけ方を変化させた結果ではない。 […] 抽象的概念としての創作や技術——それらは創作者や生産者を変様のプロセスから排除するかぎりでは形態を変様させることができる——に、植物はメタモルフォーゼの直接性を対置させる。産出はつねに自己変様なのだ。<sup>3</sup>

まさに「メタモルフォーゼ」という語が用いられているこの箇所では、とりわけプロメテウス神話の提示する技術観が批判されていると言える。植物に手という器官が欠けていることは、人間を特徴づけて技術の必要性を説明するような「不足」ではない。コッチャによれば、植物によるその形態の発明は発明者そのものの在り方には関与しない創作や技術なのではなく、みずからを変様させること、メタモルフォーゼなのである。プロメテウス神話への直接的な言及はないものの、ここには『メタモルフォーゼ』の技術論につながる問題意識をはっきりと見てとることができる。

さらに『植物の生』の第6章ではより踏み込んだ考察がおこなわれている。

生物と世界とのあいだのより原初的な関係とは相互投影 [projection réciproque] の関係である。つまり、生物がみずからの身体によって成し遂げるはずのことを世界へと譲渡し、そして反対に、その生物にとって外的であるはずの運動の実現を世界が生物に委ねる、そうした運動のことである。技術と呼ばれるのはこうしたたぐいの運動なのだ。<sup>4</sup>

ここで技術は、人間身体の各種器官がその外へと投影されたものではなく、生物と世界とのあいだの「相互投影」あるいは相互委譲の運動として捉えなおされている。この関係はさきほど引用した箇所にある「メタモルフォーゼの直接性」に相当し、さらには『メタモルフォーゼ』での「繭」の運動、すなわち自己と世界の再構築にも相当するだろう。ここにもやはり一つの技術論的な問題意識を見いだすことができる。

<sup>3</sup> Ibid., p. 25-26. 日本語訳、18 頁。

<sup>4</sup> Ibid., p. 50. 日本語訳、48 頁。

くわえて、もっぱら器官に着目する態度に対する批判的な距離もまた『植物の生』に見られることを指摘しておくべきだろう。もちろん器官の弁別がまるごと斥けられるわけでも、器官学が直接に言及されているわけでもないが、人間あるいは動物本位のモデルに対する批判は『植物の生』の主たるテーマと言える。そうしたモデルとして取り上げられているのは、おもにマルティン・ハイデガーの世界内存在であり、ヤーコプ・フォン・ユクスキュルの環世界（Umwelt）である。現存在あるいは人間をモデルとした世界内存在は、まずは魚類と四肢動物との中間にあるティクターリク・ロゼアエについての考察、そしてやはり植物についての考察を通じて、浸り（immersion）という観点から捉えなおされる。まずは「浸り」について、すこし長くなるが第6章から引用しておこう。

世界内存在が浸りであるなら、思考することと行動すること、じぶんの仕事をする 것과呼吸すること、体を動かすこと、創造すること、感じることは、不可分なものになるだろう。というのも、浸っている存在と世界との結びつきは、主体が対象とのあいだに維持するような結びつきになぞらえられるのではなく、クラゲとそのクラゲをそのクラゲとして存在させてくれている海との結びつきになぞらえられるようなものだからだ。わたしたちと世界の残りの部分とのあいだにはどんな物質的な区別もない。<sup>5</sup>

コッチャのいう「浸り」とは生物と世界とのあいだの相互浸透であり、さきに見た「相互投影」ひいては「メタモルフォーゼの直接性」にほかならない。魚やクラゲといった海の生物——『植物の生』に登場するのは植物だけではない——に認められたこの在り方は、陸地へと進出し、根を張り、光合成によって大気をうみだした植物にも認められることになる。

そうして展開される葉の理論、根の理論、花の理論にここで立ち入ることは紙幅の都合から適わないが、こうした「浸り」モデルがユクスキュル的な「環世界」モデルに取って代わるものとして提示されている点をあらためて確認しておきたい。コッチャによれば、イマヌエル・カントの教えに従ってあらゆる動物に自身の器官を支配する主体としての身分を認めるべきだとしたユクスキュルの観念論的なモデルは、すくなくとも二つの理由で不十分である<sup>6</sup>。第一に、このモデルは主体と世界の間を認知と行動のものと理解しており、世界へのアクセスはそうした二つの経路でしか与えられないことになる。この批判は、最初に引用した箇所「抽象的概念としての創作や技術」が斥けられたのと平行だろう。そして第一の点から帰結する第二の点として、世界へのアクセスが特定の器官に限定されるということがある。認知に関わるものであれ行動に関わるものであれ、そうした器官を前提としたモデルによっては植物を捉えることは当然できないだろう。植物にはユクスキュルの取り上げるダニがもっているような認知器官も運動器官も備わっていないからだ。そうした一部の生物にのみ備わっている器官を通じてしか世界のアクセスを語れないことは、人間をモデルとする世界内存在をいわばひっくり返すことで「浸り」モデルへと再編し、そこから生物そして世界を捉えなおそうとす

<sup>5</sup> Ibid., p. 47-48. 日本語訳、45 頁。

<sup>6</sup> Ibid., p. 57-59. 日本語訳、58-59 頁。

るコッチャにとってあまりに不自由である。

以上、駆け足での検討となったが、『植物の生』に含まれている技術論の萌芽を見てきた。それは、プロメテウス神話のヴァリエーションや器官投影といった考え方に代えて「浸り」という相互投影による自己変様のプロセスを提示するものである。技術という概念を脱人間化あるいは脱動物化するこうした試みは『メタモルフォーゼ』にたしかに引き継がれている。では『メタモルフォーゼ』の技術論は『植物の生』のその焼き直しにすぎないのだろうか。おそらくそうではない。

## 2. 「技術についての新たな考え」

『植物の生』で新たに技術と呼ばれた「相互投影」つまり「生物がみずからの身体によって成し遂げるはずのことを世界へと譲渡し、そして反対に、その生物にとって外的であるはずの運動の実現を世界が生物に委ねる」という独特の運動<sup>7</sup>は、そのまま『メタモルフォーゼ』の「繭」の議論に活かされているように見える。つまり「繭」は自己を変様させる空間であるが、それはたんに自己が閉じこもることのできるような、世界から隔絶された空間ではない。「繭」は自己と同時に世界をも変様させる<sup>8</sup>。あるいは、世界を動かすために自己を変様させる。生物自身と世界の両方に関わる点で「繭」は「相互投影」あるいは「浸り」との概念的な連続性を維持している。

もちろん相違もある。「繭」には、異なる二つの形態（イモムシとチョウ）あるいは生（地上を動きまわる生活と空中を飛翔する生活）を共存させる変態のテーマが付け加わっている。『植物の生』でも用いられていたメタモルフォーゼという語は、これによってより大きな概念的射程を獲得したと言えるだろう。じっさい、どうしても受動的なニュアンスをとまなう「浸り」にくらべて、さらには「相互投影」にくらべてすら、「繭」はいくばくかの能動性を、ただし人間や動物をモデルとするような主体のそれとはすこし異なる能動性を予感させる。世界のどんな部分においても「繭」は作られる。「浸り」から「繭」への転換を状態から技術への転換として捉えることもできるかもしれない。いずれにせよ、「繭」という形象が導入されることで、相互投影の運動はその範囲を大きく拡大した。

「繭」にはイモムシがチョウへと変態する蛹だけでなく、さまざまな道具や機械、本といった非生物すらも含まれるのである<sup>9</sup>。それらはその使用者を、あるいはそこから新たな知識や考えを得る者をメタモルフォーゼさせる（したがって文字どおりの昆虫的な変態がおこなわれる必要はない）。

ところで、『植物の生』でも『メタモルフォーゼ』でも遺憾なく発揮されているコッチャの哲学的身振りは、新たな考えや概念、形象が導入される際、それがたんなる拡大に終わらない点にある。たとえば『植物の生』は現代哲学であまり取り上げられてこなかった植物に光をあてたが、しかしそこでおこなわれているのは、たんに哲学の版図を人間や動物から植物へと拡大する以上のことである。哲学という既存の地図へと、すでにある勢力図はそのままに、未知の領域を書き込んでいくのではなく、あるいは西洋哲学という伝統あるメジャーな勢力の傘下にマイナーで目新しい存在を加えるので

<sup>7</sup> Ibid., p. 50. 日本語訳、48 頁。

<sup>8</sup> Coccia, *Métamorphoses*, op. cit., p. 97. 日本語訳、80–81 頁。

<sup>9</sup> Ibid. 日本語訳、81 頁。

はなく、そうした地図や力関係を根本から描きなおし再編成するということである。コッチャにとって植物は、既存の哲学的（あるいは倫理的）言説に新たに付け加えられたトピックではない。人間をモデルとする世界内存在や動物をモデルとする環世界といった強力な概念を相手取りながら、それらをその前提から根本的にひっくり返す可能性を秘めたテーマである。それまで哲学に登録されていなかった対象を新たに登録するのではなく、新たな対象から哲学そのものの再編を試みようとする身振りは、コッチャを非凡な哲学者にしている。

こうした哲学的身振りは『メタモルフォーゼ』において、とりわけ技術論的な洗練の点で発揮されているように見える。つまりこの本の提示する「技術についての新たな考え」もまた、たんに技術を哲学の版図のうちに書き込むものではないということだ。新たな考えといっても、現代社会を規定している近代的な科学技術ないしテクノロジーが扱われるわけではない。そうしたテクノロジーは、もちろん人間以外の存在にも関わるとはいえ、やはり人間あるいは人間社会が前提とされている以上、出発点にふさわしくない。テクノロジーが重要な問題であることに疑いはないが、それだけが技術論の唯一の途ではないのだ。コッチャのとる途は、人間に限定されない生命論的なそれである。ところで、その生命論的な技術論が成り立つにあたって、こう言ってよければ、一種の「相互投影」がおこなわれているように思われる。つまり技術についてコッチャの提示する新たな考えは、いわば、生命からの技術の捉えなおし（脱人間化）と、そうして捉えなおされた技術からの生命の捉えなおし（自然／人工という区別の解消）という二重の手続きのうえに成り立っている。技術の脱人間化という第一の手続きは『植物の生』に萌芽していた考えを洗練させたものであり、自然／人工の撤廃という第二の手続きはおそらく『メタモルフォーゼ』を特徴づけるものである。それぞれの理路を簡単にまとめておこう。

第1節で簡単に触れたように、技術についての旧来の考えの典型となるのは、プロメテウス神話のヴァリエーションおよび器官投影という考え方である。これらはじつのところ技術哲学のみならず通念としてもひじょうに力あるものであり、簡単に斥けることのできない説得力をもつ。「浸り」が相手取っていたハイデガーの世界内存在やユクスキュルの環世界と同様、人間の起源を語るプロメテウス神話も技術的対象の成り立ちを説明する器官投影もひじょうに強力な敵と言える。

プロメテウス神話にはいくつかのヴァージョンがあるが、技術論の文脈で最も知られているのはプラトンがその初期対話篇で当代随一のソフィストであったプロタゴラスに語らせたそれだろう<sup>10</sup>。さまざまな死すべきものたちを地上に誕生させるにあたって、ゼウスはプロメテウスとエピメテウスの兄弟へと、そうした死すべきものたち（基本的には動物）にふさわしい装備と能力を分配するよう命ずる。弟エピメテウスがこれにあたり、兄プロメテウスがその検査をおこなうことになったが、エピメテウス——あとから考慮するもの——は人間のことを忘れて分配を終え、与えることのできる能力を使い切ってしまう（能力の欠如による人間の定義）。これを案じたプロメテウスは、ともに技術あるいはわざを司る神であるヘファイストスとアテナのもとから技術知と火とを盗み出して人間に与え

<sup>10</sup> プラトン『プロタゴラス——ソフィストたち』藤沢令夫訳、岩波文庫、1988年、41-46頁。

たのだった（欠如を補完するものとしての技術）。その後、生活のための技術のみでは生存が立ち行かなくなった人間に対してゼウスがヘルメスを通じて<sup>アレテー</sup>「徳」という政治的な技術を与えるということが語られ、そしてこれがプロタゴラスの話の主眼であるのだが、技術論において着目されているのは、それゆえコッチャが取り上げているのは、人間の起源的な「欠如」とそれを埋める技術であるので、ここでも話題をこれに限定しておこう。じっさい、プロメテウス神話を20世紀フランスの先史学者アンドレ・ルロワ＝ゲーランの外化（*extériorisation*）理論——おおづかみに言えばこれも器官投影のヴァリエーションとみなしうる——により裏づけることで独自の技術論を切り拓いたベルナル・ステイグレルも、そうした「欠如」の議論を中心に扱っている。人間の「欠如」を補完する技術は、たんにその身体を補綴するにとどまらず、それを拡張することになる。ハンマーは前腕とこぶしが、メガネは水晶体が、コンピュータは脳が、身体の外部に再構成されたものということになる。もはや一般通念となっているように思われるこのアナロジーは、さまざまな道具や機械——とりわけ「スマート」なそれ——に取り囲まれたわたしたちを一種のサイボーグとみなすよう導くだろう。ここにはたしかに技術論の一大トピックがある。

だが、コッチャの哲学はこれでは満足しない。そうした技術やテクノロジーを論じているうちは、それらが人間の「欠如」を埋めるもの、身体器官を外部に投影したものとみなされる以上、その理論はあくまで人間の哲学にとどまり、技術や人工物は人間に専有され続けている。もちろんそうした技術論や人間の哲学そのものは何としてでも斥けられるべきものでは決してないのだが、植物をはじめとするノンヒューマンから哲学を再編するコッチャにとってそれらが窮屈にちがいないことは想像に難くない。『メタモルフォーゼ』が「繭」という形象のもとに進める技術の脱人間化は『植物の生』以来の生命論によって要請されたものである。その生命論において技術は、人間という特定の動物にその「欠如」を埋めるべく与えられたものではなく、人間を含むあらゆる生きものがおのれとおのれの種の生存のためにおこなっている活動として捉えなおされる。コッチャのいう「繭」は、変態をおこなう昆虫にのみ見いだされるのでも、ましてや人間にのみ見いだされるのでもなく、「生きものが自身と結びつくところであれば、あるいはさまざまな生きものが惑星と結びつくところであれば[…]どこにでも存在する」<sup>11</sup>。この「繭」は、「技術のパラダイム」であるばかりか世界内存在でもあると言われているように<sup>12</sup>、生きること、生存すること——そこには食べることも含まれるだろう——と不可分のものとして概念化されている。

このように技術がいわば生命に内在的なものとして捉えなおされることで、「自然／文化（人為）」あるいは「自然な／人工（人為）的な」といったカテゴリーもまた根本的な変質を被ることになる。もっぱら人間の側に帰せられる「文化」や「人工（人為）」と、逆に人間の手が入っていないことで特徴づけられる「自然」や「自然な」（あるいは「野生の」等々）との概念的な対立は、生命論的に捉えなおされた技術の概念によって解体される。じっさい、あらゆる生きものがみずからみずからそこに生きる場に対して技術的な介入をおこなっているのだから、つまり生きるとは技術的な活動

<sup>11</sup> Coccia, *Métamorphoses*, *op. cit.*, p. 104. 日本語訳、88 頁。

<sup>12</sup> *Ibid.* 日本語訳、同前。

であるのだから、たとえ人間の手が入っていない「自然」や「野生」であっても、それは生命論的な技術論の観点からすればまったく「自然」ではない。『植物の生』は植物が無機的な世界をつくり変えてゆくさまを、触れるものすべてを黄金に変えるミダス王の力になぞらえていたが<sup>13</sup>、同じことが生命一般についても言われなければならないだろう。無垢なる自然ではなく、生命の手が触れた自然を考えねばならない。自然あるいは自然環境は、決しておのずからできあがるナチュラルなものではなく、さまざまな生きものがさまざまなしかたで工夫してきた結果であり、そうした工夫によって維持され変化してゆくものなのである。この観点からすれば、自然は本質的に技術的であり人工的である<sup>14</sup>。自然と<sup>キユルチュール</sup>文化の対立は、自然が生命による一種の<sup>キユルチュール</sup>耕作の結果とみなされることで解消される。自然のこうした再定義は生命論的な技術論の大きな成果となるだろう。

### 3. さまざまな（一般）器官学

以上に見てきたコッチャの技術論は、さしあたりベルクソンにその源流を見いだすことのできる生命論的な系譜、すなわち一般器官学（*organologie générale*）という名のもとに指し示されることの多いそのうちに位置づけることができるように思われる。もちろん『メタモルフォーゼ』にも『植物の生』にもベルクソンへの直接的な言及はなく、また詳細を見ていくなら当然ながら大小の相違があるだろうが、しかし人間を含む生命一般の活動を一種の生存戦略として扱うという（当たり前と言えはごく当たり前の）姿勢——すなわち *primum vivere* の精神——を本質的なものとして共有しているはずである。じっさい、ベルクソン哲学において「生命の歴史とは、文化＝耕作（*culture*）の歴史であり、運河化（*canalisation*）の歴史であり、有機組織化（*organisation*）の歴史にほかならない」<sup>15</sup>のだとしたら、カンギレムが一般器官学と呼んだこの生氣論とコッチャの生命論的な技術論をあえて隔てる理由はないだろう。

すぐさま付け加えておかねばならないのは、ひとくちに「（一般）器官学」と言ってもそれぞれの論者で内実が異なるという点である。つまり、ベルクソン、カンギレム、シモンドン、スティグレル、ホイの器官学は、まっすぐひとつらなりになっているというよりも、それぞれがそれぞれに対して部分的に重なりあったり無関係であったりするような別箇のプロジェクトとして捉えたほうがより実態に即している。本節ではその多様性を概観しておくことにしたい<sup>16</sup>。

ベルクソンを「機械的発明を生物学的な一機能、つまり生命による物質の有機組織化の一側面とみなした、唯一のではないにしても、稀有な哲学者のひとり」とし、さらに「『創造的進化』とは言えなれば一般器官学概論である」とカンギレムが述べたのは、『生命の認識』（初版 1952 年；増補版

<sup>13</sup> Coccia, *La Vie des plantes.*, *op. cit.*, p. 20. 日本語訳、11 頁。

<sup>14</sup> 日本語では「人工的」と訳されることの多い « *artificiel* » をコッチャは生命一般へと拡張して用いている。したがって「人」が含まれる訳語は不適と言えるが、しかし新語を考案するとそうした概念的な拡張がかえって見え難くなるおそれもあり、日本語訳では通例に倣って「人工的」とした。

<sup>15</sup> 藤田尚志『ベルクソン——反時代的哲学』勁草書房、2022 年、391 頁。奇しくも本書の続く箇所では「ミダス王の手」という表現が用いられている。

<sup>16</sup> 紙幅の都合上ここで詳しく取り上げることは適わないが、器官学の裾野はこれらの論者に限られるわけではない。その広がりについては藤田『反時代的哲学』（同前）の § 83、とくに 435 頁以下を参照。

1965 年) に収められた「機械と有機体」の脚註においてであった<sup>17</sup>。カンギレムがこのように記したとき、その念頭にあったのはほぼ間違いなく『創造的進化』の第 2 章にあるつぎの一節であったとされる<sup>18</sup>。「このように、知性の要素をなす諸能力はいずれも物質を行動の道具 [instrument d'action] に、すなわち言葉の語源的意味での器官 [organe<sup>19</sup>] に変形することを目ざしている。生命はさまざまな有機体 [organismes] を生みだすだけでは満足せず、それら有機体に付属物として非有機的物質 [la matière inorganique] そのものを与えて、これが生物の丹精 [industrie] によって大がかりな器官に転化されることを望んだのである」<sup>20</sup>。生命あるいは生物の進化は、たんに生物の有機的な身体を生みだしただけでなく、それを補うものとして、物質という非有機的なものを行動のための道具にすることを、知性（あるいはむしろ知能）に任せている。現時点でその末端にいるのが人間であり、そして人間という生物の丹精つまり産業は、機械をはじめとする各種テクノロジーによって生命の望みを達成しつつある、ということになるだろう。このようにベルクソンの生氣論——カンギレムの言い方では一般器官学、あるいは藤田の言い方では（非）有機的生氣論——は、コッチャと同様、技術的活動と生命とを不可分のものとして捉える観点を提供している。

このようにベルクソンは有機的なものと非有機的なものの関係を捉えたが、これをサイバネティクス——いわゆるセカンド・オーダーのそれも含む——やドイツ観念論の議論をもとに展開したのがユク・ホイである。その代名詞としては『中国における技術への問い』という 2016 年の著作<sup>21</sup>で示された「宇宙技芸」のほうがふさわしいだろうが<sup>22</sup>、おそらく「（一般）器官学」という呼称を最も自覚的かつ体系的に引き受けたのはこの香港出身の哲学者であると言ってよい。ホイが師と仰ぎ、じっさい理論上の強い繋がりをもつスティグレールにおいて一般器官学は「人間の感覚の三つの次元 [= 身体およびその生理的組織、それらの人工的器官、身体と人為的なものの接合からなる社会的組織] が結びつくことによる歴史と、そこから生じる緊張や創意、そして潜在力の歴史を総合的に研究する」<sup>23</sup>ものとして位置づけられるが、動物と機械——有機的なものと無機的なもの——における制御と通信の

<sup>17</sup> Georges Canguilhem, *Œuvres complètes*, tome II, Paris, Vrin, 2021, p. 474. なおこのテキストは 1947 年の講演が元になっているとされる (*ibid.*, p. 319)。

<sup>18</sup> 藤田『反時代的哲学』前掲書、391-392 頁。

<sup>19</sup> アンドレ・ラランドの *Vocabulaire technique et critique de la philosophie* もフランス語 *organe* の語源にあたるギリシア語 *ὄργανον* が道具 (instrument) を意味するものであったことを紹介している。

<sup>20</sup> ベルクソン『創造的進化』真方敬道訳、岩波文庫、1979 年、196 頁（〔 〕は引用者による）。ただし訳文は一部変更した。

<sup>21</sup> ユク・ホイ『中国における技術への問い——宇宙技芸試論』伊勢康平訳、ゲンロン、2022 年。「宇宙技芸」は 2019 年の著作『再帰性と偶然性』（原島大輔訳、青土社、2022 年）などでも継続して扱われている。

<sup>22</sup> じっさい、ホイの名を思想史に刻むことになるのは、西洋近代的なテクノロジーだけを唯一の技術のあり方とみなすのではなく、自然や技術、文化に先立つ「原技術」である多様な宇宙技芸 (cosmotronics) に光をあてることでポストヨーロッパの思考を切り拓こうとするこのプロジェクトだろう。スティグレールが西洋技術論の交差点にいとすれば、ホイはそれを一種の世界哲学として展開しようとしているとも言えるかもしれない。個々の所論に同意するか否かは別にしても、このプロジェクトの意義は——それは「近代の超克」という簡単には方を付けることのできない問題にも取り組むものであるのだからなおさら——十分に評価され議論されねばならない。

<sup>23</sup> ベルナール・スティグレール『象徴の貧困 1 ——ハイパーインダストリアル時代』ガブリエル・メランベルジェ、メランベルジェ真紀訳、新評論、2006 年、28 頁（〔 〕は引用者による）。



理論であるサイバネティクス（およびその発展）も考察対象とする点でホイの試みは思想史的にもより深く広いものとなっている。

シモンドンもまたこうした有機的なものと非有機的なものとの関係をめぐる流れにしばしば位置づけられるが、じつのところ「一般器官学」に限って言えば、おそらく最も特殊な限定された意味でこの語を用いている。カンギレムと同様、シモンドンも「一般器官学」については多くを語ってはいないが、1958年に刊行された『技術的对象の存在様態について』の第1部第2章第3節「技術的個別化」の末尾でつぎのような定義を与えている。

個体よりも下にある技術的对象は技術的要素と呼ぶことができる。要素と呼ばれうるこうした対象は、連合環境を有していないという意味で真の個体から区別される。そうした対象は一つの個体のうちに統合されうるのだ。熱陰極管は完全な技術的個体というよりも技術的要素である。つまり熱陰極管は生きた身体のうちにある一つの器官オルガンと比較することができるのである。こうした観点からすれば一般器官学をこう定義することができるだろう。すなわち、一般器官学は技術的对象を要素の水準で研究するものであり、そして完全な技術的個体を研究する機械学メカノロジーとともに技術論の一部をなすのである、と。<sup>24</sup>

シモンドンは技術的对象を要素（*élément*）と個体（*individu*）と総体（*ensemble*）という三つの水準で分析する。生体とのアナロジーを用いておおづかみに理解するなら、「要素」（つまりはパーツ）を器官に、「個体」をそれら器官からなる生体に、「総体」を生体のまとまり（一種の生態系）に対応させることもできるかもしれない。この定義に従うなら、シモンドンにあつて「一般器官学」そのものは生体という器官あるいは臓器にあたる要素という水準で技術的对象を研究するものであつて、たしかにそこに生体と機械のアナロジーを或る程度は認めることができるものの、ここまで見てきた問題系を共有しているとは言えない<sup>25</sup>。つまり有機的なものと非有機的なものの関係を扱うものではないのである<sup>26</sup>。もちろん全体として見ればシモンドンの技術論は（ここで詳論はできないものの）ベルクソン以来の伝統のなかにあると言えるのだが、「一般器官学」の定義については他の論者にはない独自の位置づけを与えている。

<sup>24</sup> Gilbert Simondon, *Du mode d'existence des objets technique*, nouvelle édition revue et corrigée, Paris, Aubier, 2012, p. 80-81.

<sup>25</sup> じつのところカンギレムにおいてもまた「機械と有機体」での脚註に限って言えば、たしかにその脚註はアンドレ・ルロワ＝グーランを論ずるなかでなされたのだが、しかし有機的なものと非有機的なものの関係というよりも、むしろ科学と技術の関係の問いなおし——カンギレムの技術論の端緒を示すものとしてよく知られる1947年の論文「デカルトと技術」（Georges Canguilhem, *Œuvres complètes*, tome I, 2011, Paris, Vrin, p. 490-498）以来のテーマ——が問題となっている。

<sup>26</sup> そもそもシモンドンにあつて「*organisation*」は生物だけでなく非生物にも認められる。Gilbert Simondon, *L'Individuation à la lumière des notions de forme et d'information*, Grenoble, Millon, 2013, p. 159. 日本語訳（『個体化の哲学——形相と情報の概念を手がかりに』藤井千佳世監訳、2018年、法政大学出版局）では250-251頁。

#### 4. 一般器官学の批判

コッチャの生命論的な技術論がこうしたベルクソン以来の伝統に合流するものであるとして、ではその技術論は一般器官学とどの程度まで両立しうるものなのだろうか。すぐさま思い出されるのは技術についての旧来の考えに対するコッチャの批判である。この批判はプロメテウス神話のように人間の起源を技術に求める点と技術的対象を人間の器官の投影あるいは外化として捉える点に向けられていた。明示されてはいないものの、これら2点による批判がおもにスティグレールを念頭になされていることは想像に難くない。じっさいスティグレールこそ、プロメテウスとエピメテウスの神話を技術論的な枠組みにおいて取り上げなおし、それをルロワ＝グーランの外化理論によって裏打ちすることで独自の記憶技術論を立ち上げたのであった。コッチャの批判はスティグレールの技術論的前提に再考を突きつけるものである。

とはいえ、スティグレールの技術論を一蹴してしまってよいわけでもない。その技術論は魅力あるものであり、コッチャのそれがうまくアプローチしないところを扱っている。コッチャの技術論がスティグレールの技術論を淘汰してしまうなら、それは損失でしかない。「人間」が特権視される理由はないが、しかしそれがまったく排除されるべき理由もないのである。ここでは思考の多様性を増大させる方向でコッチャと一般器官学との位置関係を捉えてみることにしたい。おそらく鍵となるのは「器官投影」との距離感である。つまり、器官投影あるいは外化という考えをどの程度まで許容するのか、許容する場合、その「器官」はどのような器官なのか。本来であれば第3節で取り上げた論者全員について検討をおこなうべきだが、残念ながらそのための紙幅も準備も足りていない。ここではシモンドンに絞ってごく簡単な示唆を与えてみることにしたい<sup>27</sup>。

「機械のうちにあるのは人間的な実在、つまり〔機械の〕作動する構造へと固定され結晶化した人間の身振りである」<sup>28</sup>と述べるなど、シモンドンには技術的対象を人間の延長として扱っているようなところがある。人間の器官ではなく身振りである（器官の構造がそのまま外に投影されているわけではない）というのは重要なポイントだが、とはいえ人間に属するものが人間の身体外に延長されたという点で議論の構図は変わっていないとも言えるだろう。じっさいコッチャの技術論からすれば、そこに自己変様（あるいは相互投影）の契機はない。シモンドンの技術論がここで終わるなら、コッチャの批判を甘んじて受け入れねばならない。だがシモンドンの技術論はすこし違った展開を見せる。技術的対象は進化するのである。この進化は個別の技術的対象、つまり此处に今ある技術的対象に施される改良ではない。「ガソリンエンジンとは時間と空間において与えられたしかじかのエンジンな

<sup>27</sup> ごく簡単に粗雑な見通しを与えておけば、やはりコッチャと最も遠いのはスティグレールということになるだろう。両者の議論は異なる水準で展開されている。ホイ自身はプロメテウス神話あるいはプロメテウス主義に対して批判的な距離をとっているが、やはりスティグレールと同様、もっぱら人間の技術を（多様なものとしてではあるが）念頭に置いているように見える。これに対して、ベルクソンの立場は（すくなくとも『創造的進化』では）人間を含む生命一般という観点を確保している点でコッチャに近いと言える。カンギレムはより人間にフォーカスしているとはいえ、科学や技術を人間という生物の活動として考えるという点ではベルクソンの流れを汲んでいると言えるだろう。以上が実地調査前になされた更新されるべきマッピングにすぎないことはあらためて強調するまでもない。

<sup>28</sup> Simondon, *Du mode d'existence des objets techniques*, op. cit., p. 13.

のではなく、初期のエンジンから私たちのよく知るエンジンへと、つまり今なお進化しつつあるそれへと向かう一つの道筋、一つの連続性があるということなのである」<sup>29</sup>。つまりそれは、発明者である人間を巻き込みながら、一種のアイデアあるいは意図としての技術性が保存され新たに展開されてゆく過程なのである<sup>30</sup>。技術的対象はたんに人間の器官や身ぶりが投影されたものではなく、それ自身の存在様態をもち、人間という生物と一種のメタモルフォーゼの関係にあると言えるだろう。

## おわりに

『メタモルフォーゼ』でおこなわれる技術についての旧来の考えへの批判は、一般器官学として括られてきたさまざまな技術論へとみずからの前提を捉えなおす視点をもたらす。そうして仕切り直された技術論はおそらく、コッチャ自身が取り組んでいるエコロジーの問題との接続を新たに見つけることができるだろう。シモンドンにあって技術的個体は連合環境 (*milieu associé*) を有している点で要素と区別されていた点を思い起こしておきたい。技術的対象に限らず個体一般が有するこの環境は、おそらくコッチャの考えている環境に近い。さまざまな個体がみずからの環境を維持し、拡大し、侵略し合っている。自然とはそうした個体とその環境が複雑に絡まり合ったものということになるのだろう。シモンドンとコッチャが交差するこの地点には、生命論的な技術論から技術論的な自然哲学へと進む道筋がおそらく見いだされるはずである。

\*本稿は、ハラサオリさんと小林勇輝さんのコレクティブ「蕊」のワークショップ「osmosism」での発表を発展させたものです。蕊のみなさんや、ワークショップに参加してくださったみなさん、そしてなにより西山雄二先生にこの場を借りて感謝申し上げます。

本研究は JSPS 科研費 20J00134 の助成を受けたものです。

---

<sup>29</sup> *Ibid.*, p. 23.

<sup>30</sup> 詳しくは拙論「シモンドン哲学における技術性の概念と人間主義の顛倒」（『フランス哲学・思想研究』第27号、日仏哲学会、2022年、156-167頁）も参照されたい。